

説話評論における「侍り」について(一)―『発心集』 『閑居友』を中心に―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-02 キーワード: 作成者: 青山, 克弥 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064207

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



説話評論における「侍り」について（一）

——『癡心集』『閑居友』を中心に——

青 山 克 弥

『癡心集』『閑居友』『撰集抄』など、所謂説話評論の系譜に位置する鎌倉期仏教説話集を瞥見するとき、まず注目される文体上の特徴は、地の文における「侍り」の頻出という現象であろう。改めて述べるまでもなく、中古の物語にあっては、語り手（表現主体）が、地の文において対者尊敬語（所謂辭の敬語を用いることは原則的にあり得ない。『源氏物語大成』本文では、この種の「侍り」は僅か三例にとどまり、しかも井上誠之助氏の所説に従えば、これはすべて書写の過程で生じた誤記にすぎず、物語ジャンルにおける「侍り」の破格的用法は全く消滅したことになる。

一方、『紫式部日記』の日記的部分にみえる独自の「侍り文」については、神田秀夫氏など多数の先学の御論考があり、近年では、根来司氏の新鮮な文章論の照射に啓発されるところが大きい。神田氏は、日記的部分の地の文の「侍り」は、大体、弁明、幅暎、注釈蛇足とみられる個処にあらわれ、「侍り」を含む文の多くは、日記執筆当時のものではなく、後の加筆、挿入であると推定され、作者と同年配の説者を予想した対者尊敬語と見られたようである。萩谷朴氏は、『紫式部日記全注釈』において、式部の娘・賢子を第一の説者として予想し、これに語りかけんとしたためにあらわれたもの

と推測されている。根来氏は、日記的部分の地の文の「侍り」三十一例がほとんど文末にあらわれ、その十八例が過去（回想）の助動詞「き」に接続することに注目された。語り手は主として自己の直接的経験を叙述するのであるから、当然に「き」が多用されるが「き」のみを使用すると、語り手の経験の認識が強く押し出され主観性があらわになりすぎる。「侍り」は、そのような主観性を抑圧し、客観性を要求するために加えられたものであり、いってみればここで語り手は、作中場面から「離れ」をもち、自分自身を心理的に遠ざけ、自分自身を客観視したことになる——と根来氏は説かれている。特定の説者を仮想して生じた準備的表現とする旧説に比すれば、これは、一種の独語的、内部発生的、自然的表現ということになるうか。

稿者は、いまこれらの所論の当否を熟慮する余裕をもたない。ただ、平安中期にあらわれた、きわめて独自で変則的な「侍り文」が『閑居友』を中心とする鎌倉期の説話評論においてその徹底と普遍化を深め、ひとつの固定的文体として定着し、成熟しつつある様相を、とりあえずごく粗放に観察するのみであり、この種の文体と説話評論の本質とのかわりの究明は、いずれ後日を期することにし

ここで注目すべきは、『方丈記』における「侍り文」である。^{注4} 地の文の「侍り」は僅か九例（古典文学大系本に拠る。底本は大福光寺藏本）、全例が文末にあらわれ、その内、七例が過去の助動詞「き」に接続し、一例が過去の推量の助動詞「けむ」に接続する。『榮式部日記』と酷似した使い方といい、ごく散発的なあらわれ方といい、「侍り文」はいまだ、その発生時の性格を変化させていないといえよう。しかし、この「侍り」は、『方丈記』の前半部分―序文から治承四年の大地震の記述まで―のみにあらわれ、一転して長明個人の私的生活に触れた後半部分には全くあらわれていない。

表 A (発心集)

	話 序	行 数	評 論 部	行 数	用 例 (侍り)
卷 第 一	1	39	10	1	0
	2	42	1	0	0
	3	46	6	0	0
	4	19	4	0	0
	5	47	6	0	0
	6	54	15	0	0
	7	18	4	0	0
	8	21	3	0	2
	9	38	0	4	0
	10	40	4	0	0
	11	47	0	6	0
	12	38	0	6	0
卷 第 二	13	28	1	0	0
	14	33	4	1	0
	15	43	0	0	1
	16	17	0	0	1
	17	41	0	2	1
	18	71	6	0	1
	19	35	6	0	1
	20	59	0	3	0
	21	16	3	0	0
	22	32	0	7	0
	23	13	3	0	0
	24	16	3	0	0
	25	13	6	0	0
卷 第 三	26	20	2	0	0
	27	20	2	0	0
	28	23	0	0	0
	29	45	2	0	0
	30	21	2	0	0
	31	40	0	0	0
	32	69	32	0	5
	33	56	28	5	1
	34	30	2	0	0
	35	21	3	1	0
	36	19	1	0	0
37	34	2	0	0	
卷 第 四	38	56	3	0	0
	39	36	0	0	0
	40	23	0	0	0
	41	17	1	0	0
	42	33	16	0	0
	43	38	17	0	0
	44	21	1	0	1
	45	56	18	0	0
	46	54	8	0	0
	47	44	1	0	0

注、1行32字(『鳴長明全集』)

その分布に歴然たる偏頗が見られるのは注目すべき現象であるが、今は、その指摘のみにとどめておきたい。

次に『発心集』であるが、「侍り」のあらわれ方は、『方丈記』のそれより、あきらかに密度は高く、分布は第一話から第一〇二話（最終話）まで広汎にわたっている。これら全六十七例（梁瀬一雄氏編『鳴長明全集』に拠る。片仮名混り整版本のみ検索。神宮文庫本はふれない）そのほとんどが所謂評論部ないしは自照的発想の部分にあらわれ、説話部にあらわれることは僅少である。表Aによれば、巻第四までのあらわれ方が、巻第五以降のそれに比して著しく少ないことが一見されよう。

	話 序	行 数	評 論 部 数	行 数	(用 例)
卷 第 五	48	59	0	0	4
	49	41	19	3	1
	50	40	8	0	0
	51	41	19	2	0
	52	17	2	4	0
	53	25	4	0	0
	54	46	0	0	0
	55	30	0	2	1
	56	37	2	2	1
	57	28	11	42	3
	58	11	61	26	2
	59	60	35	5	0
	61	62	50	16	2
卷 第 六	63	59	5	0	2
	64	56	7	0	0
	65	27	6	2	0
	66	40	2	0	0
	67	70	0	5	1
	68	25	5	1	0
	69	30	11	2	0
	70	11	58	25	1
	71	58	11	0	0
	72	11	11	0	0
	73	11	19	1	0
	74	75	120	80	2
	卷 第 七	67	14	0	0
77		24	10	4	2
78		98	84	2	0
79		40	36	44	0
80		54	2	4	0
81		10	17	4	0
82		6	11	0	0
83		8	15	0	0
84		8	15	0	0
85		122	81	0	4
86		103	0	0	0
87					
88					
卷 第 八	89	47	17	3	0
	90	11	31	2	0
	91	45	22	12	5
	92	31	39	6	2
	93	47	18	34	2
	94	29	25	0	4
	95	18	25	3	1
	96	29	31	4	0
	97	25	31	3	0
	98	22	12	2	0
	99	22	12	2	0
	100	56	41	0	9
	101				
102					

この現象は、巻第四までの各話と巻第五以降の各話とにおいて、評論部の量が大きな変動を示す事実とかかわっている。説話部と評論部の境界が混沌として分離させ難い場合も少くないが、一応、大凡の傾向を知るために、両者を分離させてみた結果が、表Aの「評論部行数」である。これによれば、巻第一、第二の評論部行数は平均して一行台であり、巻第三、巻第四では十行以上のものが次第に数を増し、巻第五では更にその傾向を強め、巻第七、巻第八では数十行という極端な肥大ぶりを示すに至る。巻第一から巻第四までの全四十七話中、十行以上の評論部は計八話にすぎないが、巻第五から巻第八までの全五十五話中、十行以上は計十七話にのぼる。表C(後述)に示す如き「評論部占有率」(評論部行数を全行数で除したもの)で言うならば、巻第五以降、占有率は顕著に増大し、巻第七においてピークに達する。巻第五―五十九話は説話部十九行、評論部四十二行、巻第六―七十五話は説話部四十行、評論部八十行と巻四あたりまではかって見られなかった肥大ぶりを示し、巻第七―七十八話に至っては、説話部が十四行、評論部が八十四行と、実に飛躍的な肥大ぶりを示す。巻第七―八十七話では説話部四十一行、

評論部八十一行所、謂跋文を含んでいる巻第八―一〇二話では説話部十六行、評論部四十行といった肥大ぶりである。ここに至っては、もはや説話部の方こそ添物であり、評論部において作者の思想なり天台教学の蘊奥なりを披瀝する素材、モチーフでしかありえなくなっている。同時に巻第五以降では、逆に説話部のみが異常に肥大し、しかも評論部を全く含まないという話もあらわれてくる。一例を挙げれば、巻第六―六十七話は、全七十七行が全て説話部であり、巻第七―八十七話の如きは、全一〇三行がそれである。要するに、巻第四あたりまで、ほぼ固定していた主たる説話部、副たる評論部という構成が、巻第五以降徐々に変容を示すに至ったのである。従って、巻第五以降の各話において、地の文の「侍り」の出現がゼロである例は、全て説話部プロパーで占められる話か、あるいは、ごく短い一、二行の評論部しかもたない話に主としてみられることであり、数行以上の量にわたる、いわば評論部らしい評論部をもつときは、二、三の例外を除けば、ほとんど「侍り」を含んでいる——といつてよからう。いつてみれば、「侍り文」が説話評論の「評論」性にもつともふさわしい文体として、定着しつつあること

を示す状況であるう。

ところが、巻第四までの各話における、「侍り」の出現ゼロの例は、必ずしも説話部プロパーで占められる話にみられる現象とは言い得ないのである。一例を挙げれば、巻第一―三話は明晰に独立した評論部を六行含み、巻第一―五話はやはり截然と独立した評論部を六行、巻第一―七話は四行、巻第四―四十二話は十六行とそれぞれ含んでいるが、「侍り」は唯一の例もあらわれないことがない。もとより『発心集』の評論部は、たとえば巻第一―六話の如く、作者自身の、地の文による評論的記述をとらず、然るべき別の賢人、識者の發言を直接話法でもって記述してこれに代えることが少なく、この場合は如何に評論部の量が多くと、「侍り」が出現しないのは言うまでもない。先に挙げた例は、いずれも、こうした事例ではないことを断っておきたい。歴然たる評論部であるにもかかわらず「侍り」があらわれない場合が多い——ことに加えて、あらわれるとすれば、せいぜい、評論部の最終部分——すなわち、各話の末端部分に、ほんの一例顔を見せるといふ傾向にあることも指摘し得るのである。巻第一―一話、巻第二―十六話、巻第二―十八話、巻第二―十九話、巻第三―三十三話（但し、この場合は、評論部の冒頭から末端に至るまで五例あらわれている）、巻第三十四話、といった事例が挙げられる。もとより、各話の末端部に「侍り」があらわれる傾向は、巻第五以降にもかなり頻繁にみられるところでもある。思うに、この各話の末端部における「侍り」の使い方が、『発心集』の「侍り文」の、原初の本来的な姿ではなからうか。若干、この末端の例を挙げてみよう。

①其の事あらましばかりにて、空しく石山の河岸にくちにけれども、乞ひ願ふ心ざしは、猶ありがたくぞ侍りし。

②加様の不思議多く聞え侍りしかど、事しげゆれば註さず。
(巻第一―一話)

③されば結縁のため、わざとまうでつゝ、をがむ人おほく侍るべし。
(巻第二―十九話)

④……とかたり侍りし。此の事さもときこゆ。
(巻第三―三十三話)

⑤むげに近き世の事なれば、皆人しりて侍りとなん。
(巻第三―三十四話)

⑥或論には、「人モン重キ罪ヲツクレドモ、聊カモクニル心ノアレバ、定業トナラズ」とこそ侍るなれ。
(巻第五―五十五話)

⑦人のかしこきにつけても、愚なるにつけても、実の道をねがふたよりと成りにけんこそ、げにあらまほしく侍れ。
(巻第五―五十六話)

⑧されば、彼の村上天皇の御服をきて、一期つひにぬがでやみけん事などをば、哀にありがたきためにこそは云ひ伝へ侍りぬれ。しかあるを、はかなき女の心にさしも尽きせず思ひしめたりけん情のふかき、猶ほたぐひなくぞ侍る。
(巻第六―八十四話)

⑨かやうならん心は、何につけてかは深き罪も侍らん。
(巻第六―八十九話)

⑩仏天の知見こそいと恥しくはんべれ。
(巻第七―八十二話)

⑪かれ悪事を思ふはくだりさまの事なれば、叶ひやすくは侍るにこそ。
(巻第八―九十六話)

これらの「侍り」のあらわれ方を、ごく大まかに要約すれば、(1)

すでに叙述した説話部に対し、語り手自身の感想・印象・推測・注釈・弁解・語り手のみの知る新事実などを付加する、(ロ)語り手の評論に代わるべき、別人、あるいは典籍の論なり主張なり所行なりを付加する——端的に言えば、説話部に対する、語り手の客観視、一種の総括的態度を示す場合に限られる、ということになろう。根来司氏的な視点からすれば、それまで作中世界(説話部)に即しつづけてきた語り手が、作中世界から「離れ」を持つに至ったときにのみ「侍り」があらわれることは疑いない事実といえよう。『方丈記』前半にのみ「侍り」があらわれるのも、要するに、前半はひとつの冷徹な観察記録であり、語り手と記述対象との心理的な「離れ」が常に介在しつづける部分であるからに他ならない。後半は、言うまでもなく、もっとも自照的、自己追及的、自己確認的営為の部分であり、語り手と記述対象との「離れ」は前半に比すれば皆無にひとしい。この種の『侍り』があらわれる余地がないのは当然ということになろう。

このように『侍り』の独自の機能は、かなり明瞭に指摘し得るのであるが、にもかかわらず、『発心集』巻第四あたりまではせいぜい各話の末端にほんの一例のみ用いるか、あるいは全く用いない、かつまた『方丈記』では僅か九例しか用いない、という消極ぶりを示しているのは、思うに、作者が、この種の「侍り」に対し、一種の変則性、破格性を自覚しており、その頻繁な使用は躊躇せざるを得なかったからではなからうか。それが、各話の執筆を重ねるにつれて、これを変則的なものとする自覚が次第に稀薄になっていき、評論部の叙述にもっともふさわしい文体として固定化しはじめたと考えたい。稿者は、いまだ、『築式部日記』と『発心集』との間の作品群における「侍り」の精査を遂げないので断定は避けたいが

地の文の「侍り」を変則視する意識は、おそらく鎌倉期まで根強く残っていたのではないか。それが『発心集』によってある程度払拭され、「侍り文」はひとつの文体のスタンダードとしての条件をようやく備えるに至り、それを『閑居友』が継承して更なる普遍化ないしは多様化を深めていった——と推測してみたい。

三

さて、『閑居友』における説話部と評論部は、『発心集』に比べれば、截然と分離し難い場合が少くない。説話部内に短い評論部的な文が断片的に象嵌され、いわば両部分が有機的にからみついており、評論部は後人の手によって付記されたものとみる推測は、『発心集』にはある程度可能であろうが、『閑居友』に対してはまず起こり得ないではなからうか。すでに西尾光一氏の御調査があるにもかかわらずここでは、各話における評論部の占有の状況を、ごく概括的に眺めてみたいため、一応管見に従って両者を便宜的に分離してみることにした(古典文庫本に拠る)。

『発心集』に比すれば、評論部が全三十二話中三十一話に含まれ、また、各話における評論部の占有率はきわめて高くなり、説話評論的な形態がひとつの完成に達したことが、まず表Bにおいて指摘出来よう。評論部占有率のみを概算し、『発心集』と『閑居友』を比較すれば表Cの如くである。

表 B

(閑居友)

	話 序	行 数	評 論 部 数	用 例
				(待 り)
上 卷	1	58	30	16
	2	32	8	10
	3	62	32	26
	4	36	13	9
	5	41	24	7
	6	25	15	17
	7	25	6	5
	8	26	14	9
	9	41	33	13
	10	33	18	7
	11	44	24	5
	12	39	5	7
	13	60	33	8
	14	32	1	2
	15	26	4	4
	16	20	1	2
	17	30	8	13
	18	16	1	3
	19	68	34	16
	20	40	34	9
	21	51	51	17
下 卷	1	38	25	5
	2	40	11	8
	3	46	4	3
	4	17	0	1
	5	94	9	11
	6	23	7	5
	7	53	11	8
	8	59	2	2
	9	40	11	6
	10	85	75	13
	11	69	53	22

注、1行31字(古典文庫本)

表 C

(発心集)

卷第一	13%
卷第二	8%
卷第三	19%
卷第四	17%
卷第五	28%
卷第六	25%
卷第七	50%
卷第八	36%
平均	25%

(閑居友)

上 卷	48%
下 卷	37%
平均	43%

『閑居友』の評論部占有率は、『発心集』が巻第五以降に示した大幅な占有率の上昇の、いわば延長線上におけるものといえよう。すなわち『発心集』は、巻第五以降で、説話評論としての形態——ジャンルの特質を明確にうちだしたのであり、ひとつの形態として相当地整備されるに至った——といえようか。『閑居友』は、これをそっくり継承し、一段と徹底化をはかったものと思われる。ここで考慮せざるを得ないものは、築瀬一雄氏の説かれる、『発心集』巻

第七・巻第八は長明の作に非ず——とする成立論^{注8}のかかわりである。築瀬氏はまた、第六巻末の七十五話の冒大な評論部の大半も長明のものではないと見ていられる。一方、巻第八—九十三話「盲者関東下向の事」は、長明自身の経験譚と考えてよいとする所説もあり、成立論は依然として先学の論議の渦中にあると言えよう。かりに、巻第七・巻第八は長明の作に非ずとする立場を守るとしても、巻第五

・六における大幅な評論部肥大の傾向は修整する必要がない。また、巻第六―七十五話の評論部を考察から除外するとしても、同巻の他の部分において、こうした傾向の顕化を認めざるを得ないのではないか。『閑居友』作者が披見したのである原『発心集』の構成・形態については依然判然とはしないが、あるいは、巻第七・巻第八の如きは、『閑居友』成立以後の増補であり、その増大した評論部占有率は、逆に『閑居友』に影響された結果であるかもしれない。この点については、更に後考に待つことにしたい。

ところで、『閑居友』においては、表Bであきらかな如く、率の増大と比例して、当然に地の文における「侍り」は類出の度を高める。『発心集』にはいまだ、この種の「侍り」の出現がゼロである話が少ないが、『閑居友』では全話にわたって「侍り」が出現し説話評論にもっともふさわしい文体として「侍り文」がほぼ完全に固定化したものとみることが出来る。しかも、『発心集』の「侍り」は、先述した如く、原則的に評論部のみであられるのに対し『閑居友』では評論部はもとより、説話部の中にもあらわれるという傾向があるようだ。それは、(1)評論部内に断片的に挿入された評論部(この種のかたちは『発心集』ではさほど顕著ではない)にあられる場合、(2)純然たる説話部にあらわれる場合、とがあり、(3)の用法は注目すべきものと考えられる。若干、その例を挙げてみよう。

①昔、空也上人、山のなかにおはしけるが、つねには、あなものはがしや。とのたまひければ、あまたありけるでしたちも、つゝしみてぞ侍ける。

②かゝるほどに、あるでし、なすべき事ありて、市にいで侍ければ……

③昔、あづまの方に、いみじく思ひすましたる聖ありけり。たゞひとりのみありて、すべてあたりに人をよせずぞ侍ける。

④かくるべき事やちかづきておほえけん、日ごろしめをきたりける山にのぼりて、ひうちげに歌をぞかきて侍ける。

⑤このさかまたぶりのそう、にはにたゝずみて、事のかくげんおいみじくかゞひたりげに侍ければ、さやうのこちじき、かたは人などは、かやうの所にはみへくる事なればこそ、など人々くは思けるほどに、すでに事よくなりて侍けるに、この僧、日ごろのすがたにて、日かくしのまよりあみみりて、かうざにのぼりけり。

⑥かゝるまゝに、月ごとに、はつせのくわんおんにまいりて(若イ女へ)、さまぐに身おうれ侍ける。

⑦もろこしに侍し時、人のかたり侍しは、昔、この国の王の後のあにゝてある人ありけり。

この内、⑦の「侍り文」の如きは、いわば説話部の冒頭におかれた一種の評論部的なものとみるべきであろう。助動詞「き」と接続していることをみても、語り手の直接経験性をやわらげ、客観化する、『紫式部日記』同様の使い方と考えられる。ところが①⑥は、すべて非経験的事実の過去を示す助動詞「けり」に接続しており、語り手の主観性をやわらげる、あるいは根来氏の言われる如き、作中世界(ここでは説話部)との「難れ」をもたしめる――機能は、いさかかみとめにくいのではなからうか。もとより、『閑居友』の評論部に頻出する「侍り」は、前掲の『発心集』の用例とほぼ同様の性格であり、説話部に対する語り手の感想・印象・推測・弁解・

注釈などを付随させた、いわば一人称発想による草子地的部分と考えてよい。根来氏的な考えで一応説明はつき得ると思われる。しかし、この㊶㊷の類は、ごく単純な、通常の三人称発想による地の文にあらわれた「侍り」であり、語り手が心理的に「難れ」をもつて、客観視しなければならぬ必然性を想定し得ないのである。「侍り」の全用例中、この種の「侍り」が占める割合についてはいまだ精査する余裕がないが、ことに上巻あたりには、かなりあらわれる傾向があることは否定出来ない。『閑居友』では、「侍り」が「けり」に接続しやすいのではないかと先に述べたが、こころみに『発心集』『閑居友』において、地の文の「侍り」がどのような助動詞と接続しているが、表Dに示して比較してみよう。（「なり」は断定の助動詞。「単独」は「侍り」のみで言い切る場合。）

表 D

発心集	
き	15
けり	3
ぬ	2
べし	3
む	4
めり	1
まし	1
なり	12
ず	1
体言	1
助詞	6
単独	18
計	67

閑居友	
き	34
けり	55
ぬ	9
べし	20
む	9
めり	19
らむ	1
けむ	19
まじ	1
まし	1
なり	20
ず	3
体言	4
助詞	37
単独	56
計	289

『発心集』においては「き」との接続が、『紫式部日記』と同様に首位を占めているが、『閑居友』では「けり」との接続が首位に立

っている。このことは、説話部内の「侍り」の出現に相応する現象であり、少くとも、「侍り」は、『紫式部日記』や『発心集』の使い方から、部分的、派生的ではあるにせよ、一種の変質をきたしたものと考えたい。これらは、おそらく評論部における「侍り文」がいつのまにか、説話部にも侵触したものと想像されるが、評論部において果していた心理的な「難れ」の機能は、もはや説話部においては無意味であると言うべく、あるいは、ほとんど無機能な、評論部の文体にひきずられて生じた、一種の文癖にすぎないものと解すべきであろうか。この点についてはいまだ考察は熟さず、時枝誠記氏が「雅語的表现」とされた『徒然草』の地の文の「侍り」などと、あるいは比較・検討の余地があると思われる。また、『閑居友』では、「侍り」が、著しく推量系の助動詞に接続し、疑問・反語の助詞「や」をその前後に伴ない、あるいは疑問副詞などを伴ない、「侍り」を含む文が、不定表現化される傾向にあることも指摘しておきたい。この点もまた、諸方面に波及しそうな問題であるが、ここでは、ひとまず、『閑居友』における「侍り」の機能の変質性・多様性を挙げておくことにのみとめておきたい。

四

すでに永井義憲氏によってあきらかにされているように、本書敵皇の相手は貴顕の女性であり、式部院とも安嘉門院とも推定がなされている。そこで、『閑居友』の「侍り」は、この内親王を特定の読者と想定することによって生じた聞き手尊敬語——丁寧表現とみるのは、いささか短絡的にすぎるであろう。すでに小林保治氏は、『閑居友』において漢字に対する仮名の使用率が高いこと、地の文

に「侍り」が頻出すること、和語本位の文章であること——の三点から、「女性のための文体」であることを指摘されている。充分音肯さるべきものと思われるが、この「侍り文」だけは、対女性読者を意識してあらわれた丁寧表現と見るよりも、説話評論の「評論」性にもっとも合致する文体として採用され、独自の発達をとげた姿であると解したい。『方丈記』では僅か九例にすぎなかった「侍り」が『発心集』はもとより、評論的性格の濃厚な『無名抄』でも、その数を著しく増大させているのを見ても、それはあきらかである。思うに鎌倉時代は、説話評論の出現とあいまって、平安中期に端を発した「侍り文」が、独自の成長と多様化を示した時期といえよう。以下、ごく概括的に述べるならば、「侍り文」は『宇治拾遺物語』でも、下巻において萌芽的なのがみられ、『発心集』『閑居友』の成長過程を経て、もっともその成熟したかたちともいえるべき『撰集抄』に至る。『撰集抄』では、もはや評論部・説話部の区別なく、ほとんど全面的に「侍り」が多用されるという徹底化をみる。『古今著聞集』の如きも、ととのった評論部をほとんど持たないにかかわらず「侍り」が相当数あらわれている。これもやはり、説話部内にまぎれこんだ、ごく断片的な自照的、評論的部分にあらわれる場合と、完全な三人称発想の地の文にあらわれる場合と二種考えられるが、いずれにせよ、評論部のための、評論部に最適の「侍り文」が、説話部をも侵触した結果であり、ここで「侍り文」は、また更なる多様性を示すに至ったということになる。『沙石集』はいまだ「閑居友」よりも「侍り」の出現の度が少ないとみられるが詳細な分析はなされていなので言及は避けたい。本稿は種々の点で意を尽し得ないことが多く、単に現象の粗雑な整理のみに終始してしまった。後日を期したい。

注1 井上誠之助氏「源氏物語における『侍り』『給ふ』『給ふる』」（『国語と国文学』昭和42・10）

注2 神田秀夫氏「紫式部日記における『侍り』」（『国語と国文学』昭和31・8）

注3 今小路寛瑞氏「紫式部日記の研究」によれば、この種の「侍り」について、「必ずしも語る相手を仮想すると否とに因らず自然に発する作者の感情的独語」であるとされる。

注4 春山要子氏「広本方丈記における五代災危の叙述について」（『九大「語文研研」』昭和38・12）では「侍り」は、自分をも含む読者を意識したものとみえられる。

注5 『発心集』巻第一から第四までは各話の末端に「侍り」用例があらわれることは多いが、巻第三―三十三話の如き、例外的に肥大した評論部においては、この限ではない。

注6 いわゆる説話部の冒頭もしくは中間に、短い自照的、評論的な文言が入ることがあるが、これらは説話部とは切り離しにくい、有機的にからみついた体のものであり、一応、評論部として試算した。西尾光一氏が、続群書類聚本『閑居友』で計算された結果では、説話部九五〇行、評論説六二〇行。

注7 『閑居友』上―二十一話は、作者慶政自身の幼年時の回想部分からはじまるため、本話全部を評論部として処理した。

注8 築瀬一雄氏「鴨長明の新研究
小林保治氏「閑居友序説四」（『早稲田大学教育学部学術研究』20号）同氏「女性のための著述と文体——『閑居友』論ノート（上）——」（『古典遺産』13号）

注9